

若年の頃に油繪を停めたる理由は恐らく三あるべし。第一は水彩畫を賣るは尙早かりしなるべく、第二は氏か仕事を爲すことの冷淡にて、宛ら事務を執るの風ありしこと、第三は友人のヒルトンが高尙なる美術を好み、アカデミツクの榮譽を得んがために苦みて、可なりの悲境に陥入りしを實見し確信したりければなり。

竹に就て 河合新藏

余が竹に興味を持つて來たのは研究を始めてからである、余が研究を始めたのは今より十數年前で、最初の二三年は思ふ如くに描けた、それより漸々無圖かしくなつて、この兩三年は途中で筆を捨てた事もあつた。研究を始めた二三年の意の如く描けたことを今

更の様に考へて見ると、その當時は形態と色とを寫生して居つたのであつた、それからのちは感じを描き現はす研究であつた、形と色とを描く實物寫生、之を學ぶにこれまでは樂で容易に進むことが出来るが、これ丈では畫にならぬ、感じを現はすといふのが畫の生命で、この生命ある畫を作るといふのは生涯の研究であるといふ事を悟つたのである(長野新聞)



石井相亭氏

盆栽を愛翫する人あり、初めは草花の美はしきを愛し、綠日にて紅や黄や紫や目の醒むるやうなものを澤山買つて喜び、又は根を分け種子を蒔いて樂しんでゐたが、やがて其ケバクしき色に飽きて、草花よりも木の花に興味をもち、梅とか藤とかいふてゐるうち、花よりも其結實に面白味を覺え、次では葉の色枝ぶり木振に美を見出すやうになつたとの話である。繪畫の鑑賞力もこんな順序に進んで行くので、最初は華々しき色彩のものを美しと見るのであるが、段々目が肥えて來ると、濛い繪に眞の面白味を感じるのである。しかしこれも極端にゆくと下手な文人畫のやうに、何だか譯のわからぬものを、オツだとか妙だとかいふて喜ぶやうになつて、根が面白いといふやうなものである。

○終日畫き終夜讀書する程の畫家にあらざれば平凡に終るべし

ロムニ